

3年ぶりとなる県外視察を福島県で実施 福島第一原子力発電所の廃炉事業に理解を深める

6月24日（金）、25日（土）県外視察を福島県において実施しました。役員21名が参加しました。

視察場所は、2011年3月11日に発生した東日本大震災で大きな事故を起こした東京電力福島第一原子力発電所や隣接する浪江町などを視察しました。

24日（金）は東京電力福島第一原子力発電所の視察です。ここでは、日々約4,000人が働いており、使用済み燃料プールからの燃料取り出し作業、燃料デブリの取り出しに向けた作業、汚染水対策、放射性固体廃棄物の管理、放射線の管理などが行われ、いわゆる廃炉作業が進められています。



全員線量計を装着

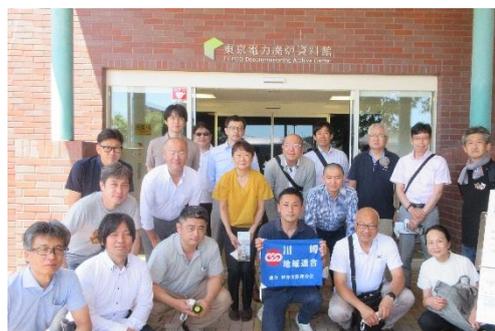
原発1-4号機の約80メートルまで近づくことができました。現場を目の当たりにしながら、廃炉が思うように進まない現状やALPS処理水と風評被害など、これまで知らなかった情報を得ることで、事故の重大性を改めて再認識しました。

宿泊先のJビレッジでは、震災後のボランティア拠点だったころの話を伺いました。



2019年に整備された天然芝ピッチ

25日（土）は、東京電力廃炉資料館を見学、二度とこのような事故を起こさないための社内伝承施設であり、廃炉事業の全容を見える化するために日々のアップデートが行われていました。



視察の最後に浪江町を訪問しました。震災遺構浪江町立請戸小学校は震災直後の対応が迅速だったため奇跡的に全員が避難出来ました。その3分後に津波が小学校を襲っています。震災前浪江町の人口は約2万人、現在は約2千人となっています。



最後に現地で見聞きたり体験することの大切さを3年ぶりに実感しました。廃炉への挑戦や町の復興事業など、知りえた情報を私たちが伝える必要性をあらためて感じた視察となりました。